

感覚環境のまちづくりシンポジウム（平成 20 年 12 月 9 日）

「環境に配慮した光のまちづくりについて」

照明デザイナー 石井幹子氏

【後援概要】

石井氏が手がけた以下の照明事例の紹介を基に、光は感覚世界の中で重要な役割を果たしており、大事に美しく使って楽しんでいただきたいこと、また、よい光環境を作るに当たっては、(1)できるだけ少ないエネルギーを効果的に使うこと、(2)自然の明かりを大切にし、その自然の明かりと共存・共生していくことが大事であるといった趣旨の講演があった。

- 上田城千本桜ライトアップ
- 奥飛騨の白川郷のライトアップ
- 「愛・地球博」の会場照明
- 熱海ムーンライトビーチ
- 浅草寺のライトアップ
- 倉敷美観地区のライトアップ
- 日仏交流 150 周年記念イベント「ラ・セーヌー日本の光のメッセージ」
- 「光都東京・LIGHTPIA 2008」
- レインボーブリッジのライトアップ
- 東京タワーのライトアップ

【講演録（抄）】

私は照明デザインの仕事をしており、今回このコンテストの審査委員としてお招きいただきましたのも、テーマの「東京タワー」の照明デザインを手がけさせていただいたご縁であると思っております。

今日は、環境に優しい光のまちづくりということで、私どもが照明をいたしました作品などを見ていただきながら、一緒に考えていければと思っております。

まず、これは満開の桜、上田城の城跡の千本桜のライトアップです。この日本の桜

は大変微妙な色合いで、これを活かす照明は非常に難しく、まさに香りの世界と大変似ているのではないかと考えております。

ピンクの墨絵を描くような気持ちで照明をいたしました。上田城跡千本桜の色々な桜の種類、少しずつ色が変わっている桜を微妙な光の変化で照らしております。

次は、奥飛騨の白川郷の照明です。満月の明かりが村全体に降り注ぐような照明を心がけました。大変厳しい様々な条件がある中で、できるだけ少ないエネルギーで明かりを創っていく、これが私どもに課せられた使命だと思っております。

次は、2年前に開催された「愛・地球博」の会場照明です。このときも新しい光源で、できるだけ環境に優しい、エネルギーをできるだけ少なく使うということに加えて、リユース・リサイクルできるものを集めて使った例です。

現在、世界的にも和の味わい、日本の伝統的なものへの興味が大変高まってきております。フランスで2000年代の初めから大変脚光を浴びた禅スタイルなど日本的なものへのあこがれがございますが、この「愛・地球博」でも「竹」をテーマにしており、竹に柔らかな光を当てることで和の明かりを創っております。また、行燈のような形の街路灯も使っておりますが、もっと早くこの香りの世界に接することができ、会場でも和の香りが漂っているということができたならもっと素敵だったのではないかと悔やまれるところです。

私は様々な機会に太陽光発電を用いておりますが、これは「愛・地球博」の中で行ったものです。小さな太陽光発電のチップと小さな発光ダイオードを組み込みまして、昼間のエネルギーで、夜、小さな光が蛍のように点滅するEXPOほたる草・ほたる花を創りました。

これは少し変わった例です。熱海の海岸なのですが、弱い月明かりをほんのちょっと青くしたような海岸で、昼間はサンビーチ、夜はムーンビーチ、先ほど磯の香りというお話もありましたが、ここは本当に天然の磯の香りが浜辺に漂って、その中を夜、月明かりを浴びながら散歩するという明かりの環境を創っている例です。

東京にも色々な顔があります。こちらは浅草の浅草寺です。浅草界限は夜非常に早

く店じまいをしてしまってお客様が夜ちっとも来てくれないが、どうしたらいいかというご相談があり、ライトアップした次第です。浅草寺の五重塔のライトアップは随分遠くからも見えますし、インパクトもあります。東京タワーが新しい東京のランドマークだとしますと、浅草寺の五重塔はまさに江戸時代の名残をとどめる東京の下町のランドマークです。

できるだけ昼間はこの照明器具を見せないようにして、夜になってどこから光が来るかわからないという感じで照明がされているというのが、私どもにとっては一つの大きな目的です。これは、左から五重塔、そして真ん中が一番大きな宝蔵門、そして観音堂という3つの建物もライトアップされております。

これは倉敷市です。江戸時代の白いしっくいのお蔵が倉敷川に沿って続いております。このライトアップは大変難問ぞろいで、この明かりの環境を創る際、非常に苦労いたしました。

というのは、伝統建築物審議会という大変厳しい審議会がまちにありまして、その12人の委員全員の賛成が得られないと何もできないという仕組みになっているんですね。ライトアップをしてほしいという地元の観光組合の方々からの強いご要望があり、伝統建築物審議会にかけましたところ、昼の景色を全く変えないでできるならやってもいいということでした。つまり、何か照明器具を新しく置きますと、これは昼の景色が変わっているということなので、絶対にだめだということなんです。では、照明器具をどこに隠したらいいだろうか。

いろいろ考えた結果、既にある街灯の三角形の傘の中に小さな投光器を入れ、その前面にレンズをつけて拡散させ、横方向に光が広がるようにしたという、大変苦心した例です。

幸い、白いしっくい建物というのは、非常に光を拾いやすい、反射率が高いということで、非常に柔らかい、私どもは光の霧に包まれたようなライトアップと言っておりますが、柔らかな光で全体が照明をされております。

続いて、私と私の娘でパリで照明デザイナーとして独立してやっております石井リーサ明理の2人で、日本とフランスの交流150周年を記念して、9月の終わりに3日間行ったイベントをご紹介しますと思います。

パリのノートルダム寺院で、セーヌ川の岩壁に幅約 40 メートルという大変大きなプロジェクションをいたしました。これは、円山応挙の虎がセーヌの水を飲みに来ている、そんな意匠なんですね。20 分ほどにまとめました日本の国宝と重要文化財を岸壁にプロジェクションして、大勢の方に岸边から、船から見ていただくといった試みでした。そして、この船が機材を積み、パリのセーヌ川を一巡します。約 25 の橋があり、その 1 つ 1 つに日本の色を染めていくというものです。

セーヌ川独特の、日本の水・川ともちょっと違う、何か独特な川のにおいというのがあります。そこでの空気感というものが、イベントを行う時には大変大事なファクターになっております。

さて、12 月 19 日から丸の内、大手町、有楽町、そして皇居外苑で開かれます「光都東京・LIGHTOPIA 2008」、これは私がプロデュースしておりますが、ご紹介いたします。

まず、去年の例ですが、和田倉橋のライトアップです。そして、和田倉噴水公園では、千代田区の小学生 500 人と著名人 150 人が明かり絵、「地球・環境・平和」というテーマでシートに絵を描いていただき、それを行燈に仕立てて、中にろうそくを灯すというイベントをやっております。これは、環境省の特別なご配慮をいただいてこの公園を使わせていただき、それから、環境大臣にも恒例で絵を描いていただき、今年は斉藤大臣にご出品いただくことになっております。

そして、これはレインボーブリッジ、こちら私どもが照明をいたしました、東京の一つの顔です。海、そして屋形船、そして中央の向こうに東京タワーが見えているという東京ならではの夜景です。これはあまり知られていないのですが、このレインボーブリッジにおいて、ケーブルにつけてありますイルミネーションの 4 割は太陽光発電で賄っております。レインボーブリッジは、今年で創立 15 周年を迎えました。そのお祝いということで、今、レインボー色でライトアップされております。

その向こうに、またオレンジ色で見えておりますのは、東京タワーのランドマークライトです。こちらの方も、30%光量がアップして、なおかつ 20%のエネルギーがセーブできたというものになりました。

この度、この照明にランドマークライトという名前を新たにつけて、末永く皆

さんにかわいがっていただきたいという気持ちも込めております。

さて、12月1日に「ダイヤモンドヴェール」という新しいライトアップが加わりました。東京タワー創立50周年を記念し、ダイヤモンドのヴェールをまとってもらおうという意図でこのデザインをいたしました。

10時になりますと、下から一段ずつ消えてまいります。空から光の天使が降りてきて、この留り木に留まっていたのが、10時になると一段ずつ空に帰っていくというイメージでデザインいたしました。

ちなみに、このダイヤモンドヴェールは、通常のランドマークライトから比較しますと50%の電気エネルギーで賄っております。

そして、2009年1月1日から1年間365日、このダイヤモンドヴェールは様々な光のメッセージを皆様に送りながら、様々な色とデザインで点灯してまいります。

私は、光でよい環境をつくる時にいつも考えなくてはならないのは、できるだけ少ないエネルギーを効果的に使うということではないかと思っております。また、自然の明かりを大切に、その自然の明かりと共生・共存をしていくことも非常に大切なことであると考えております。例えば、中秋の名月の時には、お月見モードといたしまして、少し上の方はライトダウンいたしまして、ちょうど満月を見ていただくのに適切な光を心がけております。

光は感覚世界の中で重要な役割を果たしてまいります。大事に、そして美しく使って、皆様で大いに光を楽しんでいただきたい、これは私が非常に切に願っていることでございます。